天空の調べ（絹谷幸二 天空美術館 機関誌 特別号）
Melody of the Firmament Journal of Koji Kinutani Tenku Art Museum special issue

Energy -Gods of Nature-

エネルギー～自然界の神々～

喝破 2015 年（ミクスト・メディア）

作品解説

SEKISUI HOUSE Presents Kinutani
絹谷幸二 天空美術館
Koji Kinutani Tenku Art Museum

展覧会趣旨

生命の根源である自然界のエネルギー。森羅万象を司り、豊饒と災禍をもたらすこの人智を超えた無限のパワーを象徴し、絹谷幸二が描き出した神々の姿。神話や神獣・神像が圧倒的な迫力で迫ってくる。そこには現代社会が抱える諸相が反映され、人類への警鐘が打ち鳴らされている。

自然への畏怖の念を抱き、一貫して安寧の世を問いかけてきた絹谷幸二が世界に送る、神気に満ちた熱きメッセージを前後期にわたって存分にご体感下さい。

［前期展］2023 年 12 月 15 日（金）～ 2024 年　6 月 30 日（日）
［後期展］2024 年　7 月　5 日（金）～ 2024 年 12 月　8 日（日）

作品解説

※［前］…前期展で出品、［後］…後期展で出品、［全］…全期間で出品

＜表紙＞ 喝破（かっぱ）［前］

2015 年　ミクストメディア　1940 × 2590㎜

八臂（はっぴ）に法具を持ち厳しい面持ちで念仏を唱える降三世明王（ごうざんぜみょうおう）、その背後には大爆発によって立ち上る幾層にも重なった黒煙が印象的に描かれている。そして、画面下に描き込まれた無念の眼たちが鑑賞者を覗く。

「喝破」とは「誤った説を正して、真実を解き明かすこと」を意味し、画中では明王がその役を担う。様々な形をした法具には、それぞれ煩悩を打ち砕き、断ち切り、打ち破る力が宿り、『般若波羅蜜多心経』と唱えられた経文はこの世の真理をうつす。

鑑賞者を絵画の世界に引き込む臨場感溢れる劇画的要素と、絹谷藝術の真骨頂である繊細かつ大胆な色彩表現によって強烈なエネルギーを感じさせる一点であり、そこには様々な社会問題を抱える現代社会を喝破する絹谷幸二の熱きメッセージが込められている。

本作は 2017 年に京都国立近代美術館で開催された個展「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」のメインビジュアルに採用されており、「絵には指し示して知らしめる役目がある」と語る絹谷の代表作と言える。

万物創世

黄泉比良坂（よもつひらさか）［前］

2012 年　ミクストメディア　1818 × 2273㎜

712 年に編纂されたと伝わる日本最古の史書『古事記』（上・中・下巻）の上巻神代（かみよ）冒頭から、国産み（くにうみ）神産み（かみむすみ）の夫婦神イザナギとイザナミが生死の境で迎えた悲劇的場面を描く。

愛妻イザナミの死を悼み黄泉（よみ）の国へ乗り込んだイザナミが、覗かないという約束を破り目にしたイザナミの変わり果てた姿。妻の逆鱗に触れたイザナギは黄泉の雷神たちの追跡に桃の実を投げて命からがら逃げ出し、冥界との境である黄泉比良坂を巨石で塞ぎイザナミとの永遠の別れを告げる。悲憤のイザナミの「あなたの国の人々を 1 日に千人を殺す」に対して「ならば 1 日に千五百人を生む」と応えるイザナギ。

本作は日本人の死生観の原風景をドリッピング（滴下、飛沫）技法で描いた野心作。

絹谷幸二の『古事記』シリーズは 2012 年の『古事記』編纂（へんさん）1300 年を記念して制作されたもので、絵画・立体合わせて約 30 点に万物創世の大絵巻が展開されている。

アマテラス［前］

2012年　ミクストメディア　1303 × 1620㎜

イザナギが黄泉比良坂を後にし、身体を海水で洗い清め禊を施す最後に生まれたのが三柱（アマテラス、ツクヨミ、スサノオ）。中でもアマテラス（天照大御神）は高天原の太陽神に位置づけられる最高神。ところが弟スサノオの傍若無人への怒りから天岩戸に身を隠す。アマテラスの岩戸隠れのため光を失った世界は魑魅魍魎が跋扈する暗黒の世に陥る。しかし混乱と絶望からの再生を願って八百万の神々が集結し、機知に富んだ術策によって見事アマテラスを岩戸の外へ。本作は岩戸から姿を現したアマテラスが放射する光によって世界は蘇り、人や鳥や動物など生きとし生けるものたちの歓喜の輪が広がり、生命力を象徴する百合の花が開花する復活場面のクライマックス。

国つ神 大国主神［前］

2012年　ミクストメディア　1303 × 1620㎜

大国さまで知られるスサノオの子孫である大国主神は、国造りの神として出雲大社に鎮座されている。奈良県桜井市の日本最古の神社、大神神社のご祭神である大物主神は、この大国主の別御魂の異名とも伝わり、五穀豊穣の神としても名高く、蛇の姿で顕現し天変地異や疫病封じの霊験あらたかな神として祀られる。

本作は、国造りの神大国主（大物主）を雲海に乗せ、神話ゆかりの情景を描き込んでいる。背景には御神体として崇められる三輪山を描き、太陽の口から吹き出される風は西方の二上山まで大和盆地の天空を横断する「太陽の道」を暗示している。日本文化の拠点として、国の「まほろば」と称される大和を讃えた作品。

天孫降臨「Ⅰ」「Ⅱ」［全］　**2012年　ミクストメディア　各1940 × 2590㎜ 2枚組**

『古事記』の編纂1300年を記念して制作された「古事記シリーズ」の代表作。遥か雲海から降臨する天孫ニニギノミコトとその軍船を壮大なスケールで描いたもので、絹谷幸二は制作に当たって神話伝承の地、日向の高千穂や奈良県金剛山の高天彦神社などを訪れ、入念に構想を練った。日本最古の豊饒なるイメージ世界の素晴らしさを再認識するとともに、『古事記』は絹谷幸二にとって新たなる創造へのプロローグとなったのである。

祈りの形象

菩提心［前］

2003年　ミクストメディア　各2590×1940㎜ 3枚組

巨大な画面一杯に描かれた国東半島の仏の世界。神仏習合発祥の地として知られる大分県（九州）の国東半島には、石仏や磨崖仏などが現存し、古代から諸仏を拝した敬虔な祈りが息づいている。

菩提心とはさとりを求める心のこと。紅蓮の炎につつまれるかのような色彩と激しい筆致で描かれた阿弥陀如来のお顔、そして両脇の大威徳明王と不動明王の偉容には、繰り返される戦禍と人間の愚行に対する憤怒が込められ、そのまま絹谷幸二が抱く信仰の深さ、救済への願いの強さを反映するものとなっている。世の平和と人々の安寧を願い200号3枚組として描かれた大作。

2000年代に入り絹谷幸二の絵画世界は一層自由奔放な展開を見せるようになる。激情的な画風と静謐な画風が交互に生まれ、日本的あるいは東洋的な趣が強くなっていく。とりわけ仏教的世界観の表出には古都奈良で生まれ育んだ原風景が投影され、幼少期に培われた「生きる智慧」への教えが絹谷幸二の胸中に走馬灯のように駆け抜ける。形あるものはいつか朽行くと教える「無常観」、般若心経による「空」の教え、仏とは巧みな画工のようなものと説く「華厳経の唯心偈」、相対するものの根源を双眼の見方で説く「維摩経の不二法門」などが絹谷幸二の創意の源泉に鮮やかに受け継がれている。

蓮華・祈り［後］

2011年　ミクストメディア　727×606㎜

今を盛りと美しく咲く蓮華の花、背後には穏やかな表情をした仏の姿が描かれる。蓮華は古くから仏教と深い関わりを持ち、清らかさや穢れのない様を意味する。「泥中の蓮」という諺があるように、蓮は沼地に根を張りながらもその泥中の中から養分を吸収し、泥に染まることなく美しい花を咲かすのである。また、絹谷が幼少の頃からその思想に触れた『維摩経』にも「譬えば高原の陸地には蓮華を生ぜず。卑湿の淤泥にすなわち此の華を生ずるが如し。」と蓮華に準えて自利利他の心が説かれている。

この仏教的思想と、人間への深い愛情を喚起させてくれる蓮の姿に、絹谷もまた感銘を受け「世界の平和と万年の生命連鎖の素晴らしさ」を思い絵筆を取ったのである。

静中の動如く、静謐で瞑想的な空間の中に平和を願う力強いメッセージが込められた作品であり、本作は2018年に日中平和友好条約締結40周年記念で開催された絹谷の個展「愛と祈り・豊穣の翼」（中国北京 清華大学芸術博物館）にも出品されている。

オマージュ「平治物語絵巻」左：（喝）右：（空）［全］

2007 年　ミクストメディア　各 1940 × 2590㎜ 2 枚組

平治の乱を記した「平治物語絵巻 三条殿夜討巻（さんじょうどのようちのまき）」（ボストン美術館所蔵）をオマージュした作品。平治の乱は 1159 年に起こった内乱で、京都を舞台に源氏と平氏が朝廷の皇位継承を巡った争いである。

権力抗争によって繰り返される戦禍に、憤怒の明王（喝）と静観の如来（空）の静動の姿が、紅蓮の炎の中に浮かび上がる。人間の愚かしい業を直視し、仏の教えによって人類救済を希求する作者渾身の大作。

渡岸寺十一面観音（どうがんじじゅういちめんかんのん）［後］

2009 年　ミクストメディア　1940 × 2590㎜

滋賀県長浜市の向源寺（こうげんじ）に属する渡岸寺観音堂に安置されている国宝の十一面観音立像をモチーフにした作品である。この渡岸寺十一面観音は、美しい体躯（たいく）と優しく安らかな表情をもち全国に七体ある国宝に指定された十一面観音の中で最も美しいと評される。背後には十一面観音の頭光（ずこう）かの如く神々しい陽射しが降り注ぎ、琵琶湖と湖面に浮かぶ竹生島を煌びやかに照らしている。そして足元には湖面に浮かぶ船、湖畔に集くシロサギや鳥たちの姿が描かれる。独創的な筆触と壮麗な彩色で見事なまでに表現されたこれらの描写からは、素描に対し絹谷が高い技術を有していることが見て取れる。

十一面観音は、優しい顔や厳しい顔など様々な表情であらゆる方向に目を配り、情け深い心で全ての人を救済すると言われている。静謐な情景の中に描かれるこの御仏の姿には、万物万人の豊饒、そして救世を願う絹谷の祈りが込められているのである。

自然への畏怖

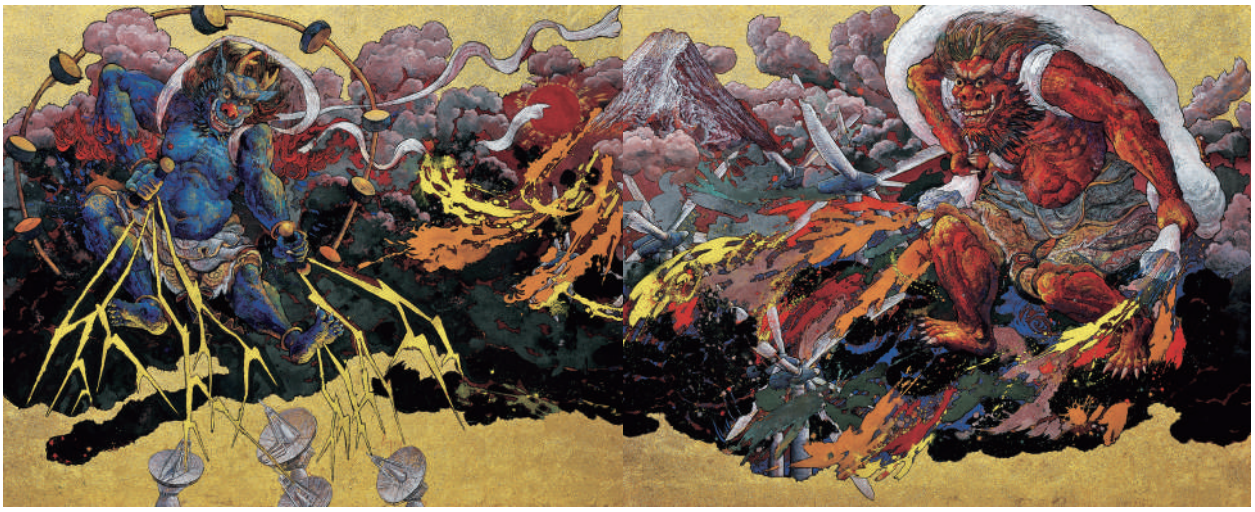
1　2　3　4　5　6　7

1. 光輝龍王二条城
2. 満月清水寺龍神飛翔
3. 飛龍天空大文字
4. 滝登る鯉転依龍神
5. 樹上双龍伏見稲荷
6. 迎臨飛龍金閣寺
7. 朝陽龍神下山上賀茂神社［全て後期］

2017 年　ミクストメディア　2590 × 970㎜ 7 枚組

日月火水木金土の七曜を示すように、金閣寺や二条城、平等院鳳凰堂など京都の名所と飛翔する龍神が描かれた７連作。「龍神は空想上の生き物であるが、これをイメージすることが非常に大切」と絹谷は本作について語る。現実に存在する京都の風景と空想上の龍神を同じ画面に描くこと、これは絹谷の創意の源泉である不二法門（「相反する概念は別々のものではなく、ひとつのものの部分である」と説く『維摩経』の教え）に通じている。

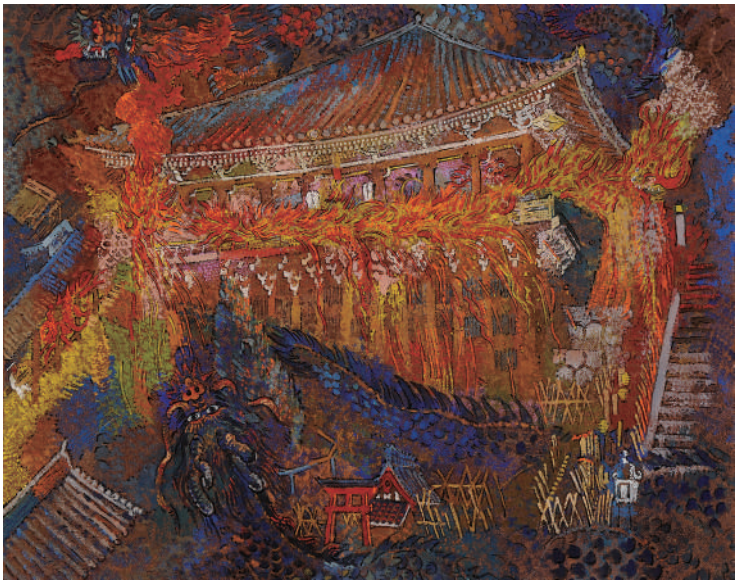
そして、「水を司るこの龍神は鴨川を示したものであり、水（龍神）は万物の命を支える巨大なエネルギーである」と絹谷は続ける。京都の街を南北に流れる鴨川の水は龍神へと姿を変えて天に昇り、やがてそれが雨となり大地に降り注ぎ私たちの命を紡いでいるのである。甚大な災禍をもたらすこともあるが、多大な恩恵も与えてくれる人智を超えたエネルギーを持つ自然への畏怖が７柱の龍神に込められている。



黄金背景富嶽旭日・風神・雷神［全］　**2015 年　ミクストメディア　1818 × 2273㎜ 2 枚組**

江戸時代の絵画を代表する琳派の祖、俵屋宗達の風神雷神へのオマージュが創意の源泉にある。旭日に浮かび上がる富士をはさみ対峙する勇壮な二神像。豪快無比な表現力で描かれた風神・雷神の目には自然を破壊する人間の傲慢さへの怒りが溢れる。風神は風車によって、雷神は雷によって電力を起こし、また富士は地熱を象徴している。それぞれ自然界の大いなる代替エネルギーを暗示させ、現代文明への警鐘を込めた大作。

炎炎・東大寺修二会［後］



2008 年
ミクストメディア
860 × 1150㎜

漆黒の闇に佇む東大寺二月堂に、豪華絢爛な装飾を施すが如く緋色の炎が絡みつく。その炎は勢いよく堂内を走り抜け、やがて神通力を象徴する龍神へと姿を変える。遊々と舞う龍神たちは闇夜に溶けては姿を現し、やがてまた行を勤める練行衆の道明りとなる。本作は、毎年３月に行なわれる修二会（お水取り）の様子を幻想的に描いた一点である。修二会の正式名称は「十一面悔過法要」と言い、二月堂の本尊である大観音・小観音２体の十一面観世音菩薩の宝前で、これまでの人生で犯した様々な過ちを懺悔し、そして新しい年が良いとしてあることを祈る法会である。古より鎮護国家や五穀豊穣など人々の幸せを願う行事として一度も絶えることなく引き継がれ、令和６年には 1273 回目を迎える。連綿と続く“祈りのエネルギー”を、光と闇が溶け込む幽美な彩色によって描き出した一点である。

祝　飛龍遊々スカイビル（彫刻）［全］

2018 年　スタイロフォーム ミクストメディア　H2450 × W1900 × D1300

淀川より飛翔した龍神が梅田スカイビル 25 周年を祝福し、祝いの玉取り龍となって舞う。

龍は水に対する畏敬の念から生まれた水の神であり夢や空想上の生き物。一方、今ここに在るスカイビルは世界的に名高い現実の建築物である。この龍とビルがおりなす迫力の躍動感は、「空想」と「現実」は相反する別々の概念ではなく、一つの物の部分であると説く、絹谷の作品テーマである維摩経の教え「不二法門」に通じている。

立体彫刻作品の存在感と重量感は、今にも龍神が動き出す迫力をもっている。そしてスカイビルの側面は全てを映し出す美しい鏡のようで、突き抜ける青空やたなびく雲を反射し、重厚な建物がまるで周りの空に溶け込み透き通って見える。天空で龍神がスカイビルと楽しげに遊々とする姿は、この天空美術館が私たちと夢の世界をつなぐ架け橋となっているかのようである。

絹谷は平面・立体・３D 映像、様々な空間に身を置き、芸術の可能性を常に追求し続けている。

自然界の神々～「里山」と「鎮守の森」

古来より日本人の心の原風景であった「里山」と「鎮守の森」。

「里山」は人々の暮らしの中で築かれ、丘陵に広がる棚田や畑地は収穫の大いなる礎となる。一方、「鎮守の森」は、八百万の神々への畏怖の念から生まれ、慈悲と加護を願う祈りの場であった。

「里山」がもたらす豊穣と、「鎮守の森」への信仰。この物心両面の存在が、日本人の精神風土を築いてきたのである。そこに通底するのは自然との共生、そして自然界の神々への崇敬。禍福をもたらす人智を超えた巨大な自然エネルギーを受け入れ、「生きる智慧」の標として、この「里山」と「鎮守の森」を次世代に伝えてゆく、その悠久の営みこそ日本人の価値観と美意識を生み出してきた源泉だったといえよう。

今、失われつつあるこの日本人の原風景を甦らせる取り組みがある。当館が位置する梅田スカイビル敷地内に築かれた「新・里山」構想がそれである。そこでは四季の慈雨に抱かれて子どもたちが豊穣の喜びを体験し、自然の大切さを学ぶことができる。そしてその時、自然界の神々を展示する天空美術館は、鎮守の森を担う如く、神々のエネルギー宿るパワースポットとなる。

自然への賞賛と愛情、そして神々への畏敬と感謝。人間の最も根源的な生の歓びが体現できる場だ。すでに 30 年続けられてきたこの試み。それを実践するのが天空美術館の運営母体、積水ハウスである。

梅田スカイビルの足元、新梅田シティに広がる「新・里山」

積水ハウスの、自然と環境への取り組み

積水ハウスが生物多様性に寄与する取り組みの一つである「新・里山」では、500 本を超える日本の在来樹種と、200 種類以上の低木・草花を植栽して雑木林をつくり、棚田や畑なども配し、失われつつある日本の原風景「里山」を都会に再現している。

雑草や落葉を取り除く現代の消費型管理ではなく、古来より里山で行われてきた自然のエネルギーを活用した循環型管理を行うことで、土壌生物も豊富になり、食物連鎖の幅を広げることができた。現在は多種多様な植物が成長して緑量も増え、40 種以上の野鳥や 20 種以上の蝶などをはじめ多くの生きものが訪れ、住み着き、育っている。都会ではあまり見られない猛禽類も飛来している。

希望の壁

また「新・里山」に隣接した高さ 9 m×長さ 78 mの巨大な緑化モニュメント「希望の壁」は、都市における垂直方向への空間緑化の手本とすべく、約 100 種類 2 万本以上の多彩な植物で緑化壁を覆っている。開花や紅葉の時期が異なる植物を計画的に配置することで、四季の表情を楽しむことができ、「新・里山」とともに生態系と共生する価値を身近に感じることができる場として親しまれている。

これらの取組みは、全国で年間 100 万本に及ぶ樹木を植栽し、多くの住宅を供給するハウスメーカーの責任として、住宅事業を通じた生物多様性保全に向け、2001 年から開始した造園緑化事業「5 本の樹」計画に基づくものである。

「5 本の樹」計画とは、「3 本は鳥のために、2 本は蝶のために、地域の在来樹種を」という想いを込め、地域の在来樹種の中でも特に鳥や蝶との関係が深く、庭木として利用可能な樹木を「5 本の樹」と定めて、その樹木を中心に植栽を行ってきた。住宅の庭が都市に質の高い緑地を増やし、生態系ネットワークが地域の生物多様性を豊かにし、人にも自然のパワーがもたらす豊かさを享受することを理想としている。

また積水ハウスは地球や自然環境を守る脱炭素社会への取り組みとして、ＺＥＨ（ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス）を推進している。ＺＥＨとは、太陽光発電など再生可能な自然エネルギーを活用して使うエネルギーを補い、実質ゼロエネルギーを実現するものである。当社では戸建住宅では 2022 年度のＺＥＨ実績は 93％で、日本全体のＺＥＨ比率 19％を大きく上回り、賃貸住宅や分譲マンションも同様にＺＥＨ化を進めている。

これからも自然と環境を守り、自然がもたらすエネルギーを活用し自然と共生する持続可能な未来に向けての取り組みを推進・継続していく、それが積水ハウスの責務であり理想である。

天空の調べ「Energy - Gods of Natuer -」特別号
2023 年 12 月 15 日 編集・発行　絹谷幸二 天空美術館
大阪市北区大淀中 1-1-30 梅田スカイビル タワーウエスト 27 階